

講演会及び研究集会の記録

弘前大学高大連携シンポジウム

「大学入学時の学力差を克服するためには
——英語教育を例として」

高校と大学の教育内容をお互いに知り、意見交換をする目的で、平成14年度から毎年テーマを決めて、夏休みに高校教員と大学教員によるパネルディスカッション形式のシンポジウムを実施している。

今年度で第6回目になる高大連携シンポジウムは、8月7日（火）総合教育棟419講義室で開催された。矢島忠夫21世紀教育センター長から開会の挨拶を受けた後、大高明史FD広報専門委員会委員長の司会の下で、高校教員2名および大学教員2名による話題提供と熱の入った意見交換がなされた。参加者は40名であった。

1) 話題提供者の発表内容

1. 「高校教育の立場から」

「高校でのボトムアップに対する取り組み——Learner autonomyを育てながら」

吉川智恵子先生（五所川原高等学校教諭）

学習指導要領の改訂により、中学校で学ぶ文法項目や文型さらに総語数の大幅な削減がなされた。オーラル・コミュニケーションの授業は以前より良いが、「書く」授業での基本的な間違いが目立つ。

ボトムアップを図る方策として、生徒が自分の学習を管理し、評価していくことのできるメタ認知ストラテジーを身に付けさせること、および生徒との意思疎通が大切であると考え、その具体的な取り組みを紹介した。自己学習管理レポートを提出させ、自律的な学習を促そうとした。質問に対しては必ず答を書いて返却し、授業時に説明したところ、生徒は面倒がらずにレポートを提出するようになった。問題の確認や、分からなかったことを生徒間で聞きあう活動、音読練習をペアで行うペア活動を取り入れたところかなりの効果が認められた。さらに、英文を書く問題については、なるべく間違いを自分で気づかせるよう、セルフモニタリングを試みたが、友人の間違いを指摘することには抵抗があり、スムーズには行かなかった。生徒との意思疎通については、授業が始まる5分前に、各自がトピックをもって職員室に来てもらい、英語で簡単な会話をすることにより、生徒との関係作りに役立った。

授業とは教師が一人でやるものではなく、生徒というよりparent in a cooperative ventureとしてお互いより良い方法を現在も模索し続けている。



2. 「高校教育の立場から」

「個に応じた指導の実践ーラーニング・ポートフォリオを活用して」

伴 一聡先生（黒石高等学校教諭）

今までの英語の授業における問題点は、「結果」重視の評価への疑問、学習者の能力・ニーズの違い、教師中心の授業展開への疑問であった。

ラーニング・ポートフォリオはこれまでの問題点を解決し、さらに生徒の英語学習に対する自立性の確立が期待できる。ポートフォリオプログラムを取り入れるに当たって、種々の問題点があるが、この対応策として収集型・蓄積型・評価型のそれぞれの利点を取り入れた統合型ポートフォリオを考案した。収集型・蓄積型の基本活動として教師が設定した授業目標の下に自己目標を設定させ、学習内容と授業ごとの省察を記述したポートフォリオを提出させることによって教師からのフィードバックをおこなった。また、蓄積型として授業以外で自分の好きなことを学習させ省察させた。評価型としては、自己評価、ピア評価、グループ間での自己評価を行った。さらに個人まとめとして、自分のポートフォリオから学び、自己アピールをし、さらに保護者に見せるようにした。これらの取り組みにより、communication能力が向上し、自己あるいは他人への関心や、共同作業での責任感が高まった。また、creativityに感動したり、presentationの重要性や家庭との連携、社会で必要とされる能力に気づかせることができた。今後継続的かつ持続的にするためには、生徒・教師がお互いに負担になりすぎないようにする必要がある。独善的にならないように、また、ポートフォリオの本質を見失わないために教師は客観的なデータも常に念頭に置き整理することも重要である。今後はラーニング・ポートフォリオと有機的に結びつくティーチング・ポートフォリオを作成し、教師自身が授業の省察をさらに効果的・効率的に進めることによって、持続的・継続的に教育活動を改善・発展させたい。家庭や他の英語教師、さらには他教科や他の教育実習、最終的には大学や企業との連携を図りたい。

3. 「21世紀教育の立場から」

「弘前大学入学者の英語能力の実態」

内海 淳先生（弘前大学人文学部准教授）

2007年度弘前大学入学者のセンター試験結果およびTOEIC模擬試験の結果を基に入学者の英語能力の実態を報告した。

入学者1389名中センター試験受験者は1164名で未受験者は推薦入学者である。TOEIC模擬試験受験者は1289名で受験率は93%であった。

センター試験では、最高得点は248点、最低は76点であった。学部別では農学生命科学部が76点から246点と最も差が大きく、医学部医学科が高得点で差も少なかった。この中には推薦入学者の結果が入っていないので、TOEIC模擬試験を入学者全員に対して実施した。推薦入学者の成績分布は中学1年レベルの低いところに集中している。また、大学全体の平均点も全国レベルより低い。このような深刻な事態に対して、本学の授業はセンター試験の成績を基に、能力別に3つのクラス編成をしている。しかし、上級クラスのみ得点差が少なく、能力別が成り立つが、初級および中級クラスは得点差が70点前後もあり、成り立っていない。また、推薦入学者は基本的に中級クラスに入れているが、下の方に格差が広がる原因になっている。格差が広がる要因として、年々入学者の英語能力の差が広がってきていること、学生数に比較して教員数が不足していること、また、学生の学力向上の意欲欠如がある。卒業時の学力保証が国政レベルで論議され、すでに多くの大学で導入されており、当大学でも対応しなければならない。しかし、入学しても卒業できない学生が大量に出てくる可能性がある。

今後の対策として、推薦入学の見直し・推薦入学後の指導や、補習授業や統一試験の導入など、英語教育体制の抜本的な変更が考えられる。現在中学1年レベルの補習を必要とする学生は180名ほどおり、この手当をどうするか、格差を縮小する努力をしなければならないと考えている。

(補足：須藤新一副学長)

内海先生からの深刻なデータを頂いて対処の仕方を検討している。前期試験の集計結果を見ながら善後策を検討していく予定である。

4. 「専門教育の立場から」

「専門課程での英語教育と推薦入学者の入学前サポート——農学生命科学部の試み」

菊池英明先生（弘前大学農学生命科学部教授）

昨年より農学生命科学部で推薦入学合格者の入学前指導を行っている。11月25日に入学試験を行い、12月に5名の合格者を発表した。合格者に対して「英語で学ぶ生物学」というかなり工夫された問題集から、12月と1月に課題を与え、それぞれ1ヶ月後を締め切りとしたが、全員が提出した。追跡調査やTOEICの結果をみて今後の見直しを行う予定である。

専門課程での英語教育の目標は、英語の論文を正確に理解し、自分の研究を展開させるための知識と方法を得ること、自分の研究成果を同僚や外部の研究者に正確に伝えること、および自分の研究成果を英文論文として発表することである。

3年前期に、科学英語に慣れさせるため専門英語2単位を行い、さらに3年前期および後期に2単位ずつ文献講読を行い、研究室配属となる。

専門英語の授業では、論文の小節をプロジェクターで提示し、聴衆に向かって音読させ、ポインターで単語を示しながら和訳させるということを通して、英語でのプレゼンテーションの必要性を理解させ、自分と聴衆とのコミュニケーションの訓練をする。文献講読の授業では、科学論文を正確に理解し、同僚に簡潔にプレゼンテーションすることができるようにする事が目的であり、必ず質問させることで同僚同士の教えあい、また、上級生を参加させることで、緊張感が生まれている。

卒業研究では自分に関係ある論文は読まざるを得ない。いかにして動機付けをするかが問題である。推薦入学の学生は、入学時は、英語能力は劣っていたが、5月に就職が決定してからは、卒業研究に集中し、英語の参考文献を多く読みこなして立派な卒業論文を仕上げた。

2) 意見交換

英語教育の抱える問題点について、活発な意見交換がなされた。

大学として学生に求める英語のレベルとして、会話は「慣れ」なので今時の学生はあまり抵抗が少ないが、文章の正確な理解には、きちんとした文型や文法など基礎力が必要であり、この基礎があれば、色々応用ができる。中学・高校では基礎の理解力に力を入れてほしい。指導要領の度重なる改訂により、コミュニケーション能力の育成に重点が置かれている中で、基礎的な学力を付けさせるには、SpeechやDebateを通して文法の間違いを教えたり、気づかせることもひとつの方法である。

また、ポートフォリオは本来個人のものだが、グループ学習を取り入れた理由は、教員からのフィードバックでは不十分であり、ピア活動を入れることにより、客観的な指標が得られ、また、コミュニケーションの促進にもなる。

大学が卒業生に求める英語のレベルは、研究者になる場合や大学院進学の場合を除くと、それほど高いものではなく、むしろ基本的なコミュニケーションやプレゼンテーションができ、相手に理解させることができることである。



(備考：『21世紀教育センターニュース』より転載)